

## 会話分析と家族社会学 ——子育てひろばにおける「近しさ」の実践——

戸江哲理（神戸女学院大学）

報告者はかれこれ20年近く、子育てひろばでのフィールドワークにもとづく会話分析的な研究を進めてきた。子育てひろばについて改めて簡単に説明すると、そこは親（その多くが母親）たちが幼い子どもを連れて訪れ、自由に語り合い、子どもたちを遊ばせ、スタッフの企画するイベントに参加できるような場所といえるだろう。政府は、その事業を委託するかたちで、これらの子育てひろばを援助してきた。援助の背景には、子育てひろばの活動が親たちの育児不安を緩和させ、その育児ネットワークを構築するチャンスを提供できるという見立てがある。この意味で子育てひろばはすぐれて「家族社会的な」子育て支援だということもできると思う。

では、実際に子育てひろばにやってきた親たちは、そこでどんなふうに心配を宥め、どんなつながりをつくっているのだろうか。それを成し遂げているのは、子育てひろばでの親・子ども・スタッフの日々のやりとりであるに違いない。そして、リアルタイムに進行するやりとりのしくみを、録音・録画されたデータを用いて解明できる会話分析は、この問いに取り組むのに適合的な方法論といえるだろう。拙著『和みを紡ぐ——子育てひろばの会話分析』（勁草書房、2018年）は、そうしたやりとりのしくみを詳らかにしたものだ。そして、それは同時に、子育てひろばという「社会的世界」のありようを描き出したエスノグラフィーでもあった。

本報告では、家族社会学の研究法というシンポジウムのテーマに寄せて、子育てひろばでの会話分析的な研究の成果を携えて一步踏み込み、「家族とは何か」という家族社会学の古典的かつ現代的な 이슈について論じてみたい。本学会が編んだ『家族社会学事典』（丸善出版、2023年）でも紹介されているように（「家族の社会学理論の動向3——解釈論系」）、質的研究法のひとつとして、家族をその実践から動的に捉えようとする視座がある。デイビッド・モーガンの「家族すること（doing family）」やジャネット・フィンチの「家族を見せること（displaying family）」というアイディアに感化された海外の諸研究もそのヴァリエーションといえる。これらの研究はだが、家族実践を捉えるにあたって、実際のやりとり自体をデータとはしていない。これに対して、会話分析は家族実践を相互行為として「生け捕り」にできるメソッドロジーだといえる。そうした眼差しを自らが進めてきた子育てひろばでの研究成果に向けたとき、親たちという他人どうしの家族実践——むしろ、「近しさ」の実践と呼ぶほうがふさわしいと思っている——とも呼びうるものが浮かび上がってくる。今回の報告では、いくつかのデータの検討を通じて、この「近しさ」が刻一刻と立ち現れる様子を「展翹」できたらと思っている。

たとえば、子育てひろばでは親たちが語り合っているときに、自分の子どもを「この人」と呼ぶことがある。そうすることで、その子どもが典型的な子どもだという相手の想定を退け、自分の子どもについて〈よく知っている〉ことを示す。また、帰り際に「あ～、また晩ごはんだ。めんどくさいな…」といった呟きを漏らすこともある。すると、傍らにいた別の親が、自分はお惣菜を使った「手抜き」メニューにするつもりだと言う。呟いた側は「（そのメニューを）頂こうか」と返す。こうして、当初は自分が（ひとりで）対処すべき問題と想定していた——それは問いかけではなく、呟きとして発されていた——ごはん作りに他の親がタッチする。あるいは、よその子どもが危険なふるまいや行儀の悪いふるまいをしたときに、親がそのふるまいを注意する権限を尊重しつつも、自分も注意することで子育てに協力する。

こんなふうに、子育てひろばという家族のメンバーと家族ではないメンバーが接するインターフェースでは、その彼我の別をあるいは際立たせ（1つ目の例）、あるいはぼやかせ（2つ目の例）、あるいは乗り越える（3つ目の例）といったかたちで、「近しさ」が実践されているように思える。

（キーワード：会話分析、子育てひろば、家族実践）